



夢喰う窯と五人の仲間たち。

一生懸命頑張ってるけど、
チャンスがみつからない人。
そんな人と、一緒に頑張りたい。
お互いに応援しあって、
もっと大きなステージへ
羽ばたいて行ってもう一つの夢です。



ART CAPTAIN

【YASUHIRO HORA】

洞

泰博

信楽には窯業試験場がある。地元はもちろん、他府県からも陶芸を目指す若い人がここに集まる。彼等はそこで技術を磨くが、自分の作品を窯で焼く機会があまりない。この地域には陶器商も多く、その中には貸窯として陶芸家に窯を提供するところもある。が、費用がかさむ上、やはり多くの陶芸家が順を待つ。

器もつましげに並んでいる。京都市の貿易商社に勤めるサラリーマン。地元の生花店やクリーニング店の跡取り息子たち。そして、元JA職員。この四人の仲間がある人物に呼掛けられ、店を共同で運営する。仕掛人はコーヒーハウス・わらべ屋主人の洞泰博さん。面ざしはどことなく武田鉄也に似るが、語り口は秋空の雲のようにソフトだ。店の前の小さな広場、キウイの木の下で彼はそのいきさつをこんなふうにした。

「洞さんは地元の高校を卒業後すぐに京都で就職、飲食関係の仕事に従事した。街で暮らしたいという想いを実現するためだが、その生活は肌に合わなかったという。互いに干渉し合わない暮らしを気楽に感じながら四年後に帰郷。その後、地元のレストランで勉強を重ね八年前に独立。珈琲の香りとステーキの味にこだわる、わらべ屋の主人として奥さんと働く毎日だった。その彼が、

「窯業試験場では主任さんや、若い陶芸家の方々という話し合うこと



ができました。そこで感じたのは、若い人たちがとても一生懸命に陶芸に取り組んでいること。しかも彼等には窯で焼く機会がなかなか与えられないことです。やっと窯を使う機会がめぐっても自分の思いどおりに焼くことができない。そのジレンマの中で努力する姿はとても印象深いものでした。もし自分で窯を設置しようとするば、場所を用意する他に窯だけで最低百万円くらいは必要だといいます。若い人がそれだけのことを自力で用意するのは難しい。萬國響堂の設立が決まったとき、自分で焼いた作品を店に置かせてくれませんか、と、何人かの若手陶芸家に呼掛けました。そうして店に窯を設置して、若手の陶芸家に使って貰おうと考えたのです」

通例、陶芸家は自分の作品をスピンリとは出さない。一度売り物として出してしまうと作品の価値が落ちてしまうからだ。これから売り出すとする若手にしても、その点では慎重なのだという。が、

「私は特に陶器に対して好き嫌いはありません。一生懸命頑張っているけれど、窯で焼く機会もないし自分の作品を発表する場もない、という人。おこがましいかも知れませんが、そんな人と一緒に頑張りたいだけなのです。お互いに応援しあう、というのでしょうか。ここから有名になってもっと大きなステージへ羽ばたいて行ってもらおうのが夢です。チャンスを求める若手に利用してもらえれば最高です」

「写真 店内にはさまざまな雑貨や小物、衣服などが並んでいる。ここで接客を担当するのは仲間の一員である藤村さん(写真の女性)。好きの彼女は訪れる人々とすぐに友達になつてしまうという。商品のアレンジや店内のBGMは中村さんという二十九歳の男性がずうの王国という花屋さんを経営・もちろ仲間の一員が担当。独特な雰囲気にも惹かれて集う固定客も増えつつあり、仲間の輪がひろがりはじめています。」

文/三村 溪
写真/北野 大地

そんな仲間の声を聴きながら、もつと洞さんの小さな窯に炎があがる。

PROFILE

昭和三〇年五月生まれ。
地元の高校を卒業後、京都市内のレストランを経て、からふね屋に入社。その後、地元のレストランなどで研修を重ね八年前に独立、わらべ屋を開業する。喫茶軽食が主体だが、オーダーメニューには近江牛のステーキも。仲間と共同経営する萬國響堂に力を注ぎながら店は奥さんと共に切盛りする毎日。実家は茶園(地元の朝宮茶)を経営。兄が家業を継いだので、自由にできたという三十九歳。コーヒーハウス/わらべ屋主主人